

士清と宣長の学的交流 —往復書簡を通して

研究部会勉強会（公開）6月28日（土） 於：津市立図書館

講師 顧問 三ツ村健吉

江戸中期に活躍した国学者に津の谷川士清と松坂の本居宣長がいた。いずれも、若い頃に京都に遊学し、帰郷して国学・神道を究める傍ら医者としても活躍した。士清が『日本書記通証』を出版した時、京都遊学中の宣長はそれを知り、その付録『倭語通音』の発明に驚嘆し、郷土の先輩として強く意識している。

後年宣長が津の草深家の娘を継妻として迎えるにいたり、二人の親交が始まり、頻繁な文通は勿論、宣長訪問を窺わせる書翰も存在する。宣長には少年時からの日記が存在するが、それによっても残念ながら確たる裏付けが取れなかった。因みに残存の書簡は士清発信が11通・宣長発信が8通で、両人の交流を知る貴重な資料である。書簡の殆どは真淵没後のもの、ただ1通宣長の初信とされている漢文体の長文のものがあるが、原稿のままで士清には届いてはいなかったらしい。二人がともに代表作『古事記伝』・『倭訓栞』の出版に取り組んでいる時の交流は、まさに学者として学問を愛する者の真剣な姿を、目の当たりにする思いに打たれた。

内容は忌憚のない質疑とその応答の交信で、飽くまでも道のため、学問のため、協力する二人の純粋な姿を見る心地がする。相手の研究を助成するための意見交換はもとより、資料の彼私融通を図り、研究の相互扶助に努めている。原稿の相互検討と意見の交換こそが、学問を愛し互いに信を置ける人にして可能なこと、かかる美しい学者の交流が、伊勢の国学者の中で見られることは誇らしい事。士清が晩年目と手足が不自由になり、『倭訓栞』の節略化を訴えた時、宣長は私情を捨て、学問の大事を敢えて説き、朋友としての初志を貫徹させた友情に、深い感動を覚えるのは筆者のみではなかろうと思う。

—— 市民公開講座を2回実施 —— 於：津市立図書館

第1回 7月12日 三重大学助教授 山本真吾氏

「現代国語辞典の達成と和訓栞」
わくんのしおり

5つのテーマ「一 国語辞典がほしい時」、「二 小型国語辞典の個性」、「三 進化する国語辞典」、「四 現代国語辞典の目的」、「五 和訓栞の成果と現代国語辞典」に分け、時にユーモアを交えてお話いただきました。特に「五 和訓栞の成果と現代国語辞典」では、「和訓栞」は次の5つの点で現代国語辞典の骨組をほぼ達成している」とのことでした。その5つとは「①五十音引きへの転換 ②字訓（どういった漢字をあてるか）③意味記述とその証拠（例文）の提示 ④語源への関心 ⑤総合的国語辞典への志向（古語、当代語）」です。しかし、「和訓栞の成立過程はほとんど解明されておらず、今後の研究が待たれる」とのことでした。

第2回 11月15日 愛知教育大学名誉教授・中部大学教授 岡本勝氏

「建部綾足と谷川士清」

建部綾足が谷川士清に宛てた明和7年（1770）3月4日付の書状についてお話いただきました。建部綾足（1719～1774）は江戸時代中期の俳人、歌人、文人、国学者として活動した人で、倭建を尊敬し「倭建の歌った“片歌”こそが俳諧の始まりである」との説をたて、倭建終焉の地に句碑を建てたいと考えていました。そこで谷川士清に倭建終焉の地を尋ねたところ、士清は白鳥陵を示しましたが、綾足は地元の人に尋ねる等独自に調査し、「武備塚が倭建終焉の地である」との結論に達し、士清の自説を激しく主張する書状を送りました。この書状が書かれた明和7年当時、士清は61歳で本居宣長と頻繁に文通をしていた頃です。その頃の士清の研究生活が平穏な日々ばかりでなく、このような論争もあったことを知ることができました。

（研究部会 塚澤 洋）

